

2019 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	子どもの「生活力」を高めるグループワーク プログラム ー生活環境に左右されないスキルを身に着けるー
キーワード	①子ども、②要保護、③グループワーク

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	コウグチ メグミ 高口 恵美	所属等	西南女学院大学 保健福祉学部 福祉学科 専任講師
プロフィール	西南女学院大学 保健福祉学部福祉学科 専任講師 ・福岡県スクールソーシャルワーカー協会 理事 ・福岡県スクールソーシャルワーカースーパーバイザー ・北九州市精神保健審議会、審査会 他		

1. 研究の概要

本研究では、子ども達の表面的な課題である、不登校、自傷行為、非行、ひきこもり、性の逸脱行動等の背景に存在する、家庭環境課題の一つである「生活力」に着目し、子ども達自身が生活するためのスキルや知識を高めるため、環境や状況に左右されず、自らの生活を維持する力をつけること。また、グループワークを通じた相互作用や、活動での「できる」経験を通して、自尊感情を高め、ストレスや環境に適応する力をつけること。人とつながり困った時に発信する力をつけることを目的としたプログラムを考案する。

今回は主として、専門職によるワークショップや、要保護性の高い子どもを対象としたグループワークを実践し、プログラムに必要な要素を整理する。

2. 研究の動機、目的

2008年に文部科学省によるスクールソーシャルワーカー活用事業が開始され、私自身も本事業に携わるようになった。12年間の実践を通して出会った、不登校や引きこもり、社会不適応などの課題を示す子ども達の多くは、貧困や虐待、保護者の養育力課題など環境要因を抱えていた。私がこれまで対応した約500ケース中8割は、何等かの家庭環境課題を抱えていた。保護者の精神不安定、安定した生活環境が整っていないなど様々であるが、保護者自身もそれらのスキルを身に付けていないケースも多く、親子ともに社会的に孤立し、十分な生活経験や生活モデルを持つことが出来ず、年齢にあった生活スキルを身につけないまま義務教育を終えてしまった。義務教育間は学校や地域が関わり、何等かの支援を受ける中で進路に結び付いた子ども達も、15歳になり支援が希薄になる中で、SOSを発信する先もわからないまま、社会生活に適応できなくなるケースも少なくない。

子ども達が環境や保護者の精神状態等に左右されず、困った時にSOSを発信する先を知り、自分の生活を保つことが出来るよう、経験や知識を得る機会が必要であると感じ、本研究に取り組んでいる。

3. 研究の結果

1) 要保護児童に関わりの深い専門職とのワークショップ

5つのカテゴリーに分け、子ども達が生きていくために必要なスキルについて話し合った。参加者は同市内で活動する小児科医、養護施設センター長、SSW、SC、要保護児童対策地域協議会事務局、養護教諭、教頭であり筆者はファシリテーションを務めた。

今後、抽出された結果を基に、それらの力を高めるための具体的プログラムを構成する。

2) 要保護児童を対象としたグループワーク

中学3年生2名、中学1年生1名を対象に、月に一回開催した。

不登校傾向および自傷行為のみられる対象生徒は、それぞれに家庭環境背景に課題を抱えていた。ネグレクトや言語の問題などから、生活経験が著しく不足しており、食事の確保もままならない状態であった。ワークショップでは「自分の心と向き合う時間」と「食事を準備するスキル」を重視したグループ間の交互作用を意識した活動を導入した。

それぞれのペースで自分自身の気持ちと向き合い、3年生2名はそれぞれ、学校（別室）と適応指導教室へつながり進路を決定した。

今後も活動を通し、子ども達が生きていくために必要な力について精査し、プログラムの構築へと取り組みたい。

4. 研究者としてのこれからの展望

すべての子ども達が自分らしく生きる力を高めることを目的とし、子どもを主役に対話する文化を多世代に広げたい。そのために必要な環境は、人々が立場や評価から解放された安心安全な場所であり、他者の想いに触れ、多様な考えや価値観を受け入れる中で、自身の想いや力に気づく環境がある。こうした対話や活動を通し、子ども達は主体的に人生を選択し柔軟に行動する力を身に付ける。中には、今回の研究で対象となった、要保護家庭のようなより特別なプログラムを通して、基本的な力を身に付ける機会を提供することも必要であるため、今後も研究を継続したい。

5. 社会に対するメッセージ

子ども達との交流を通して互いの可能性に気づくことによって、大人も考え方や視野が広がり、自身の事業に活かされ、また生活が豊かになっていく。

多様性を受け入れ、ヒエラルキーから解放された対等な関係性の中で行われる「対話」こそが、現在のメンタルヘルス課題を解決する一つの鍵となるのではないかと考える。